は，高桑さんから多くを教えていただいた．というよりも私がかなり力不足だったのでいろいろとご心配をおかけした．委員会の後は，近くの居酒屋や東京駅の地下街で一緒に呑ませていただいた．RDB や博物館のいろいろな情報を教えてくださり，昔の甲虫界の虫や人の話も楽しく伺った．環境省が 2015 年にまとめた「種の保存法」の「特定国内希少野生動植物種」では小笠原産のタマムシ，カミキリ，ハナノミ，15 種 1 亜種が指定されており，高桑さんには全く問い合わせも説明もなかったようで，専門家を差し置いての指定の経緯にはだいぶ憤慨されていた．夜遅くにお電話をいただき話し込んだことをよく覚えている．

高桑さんは，私を虫の世界に誘ってくれた遠藤俊次さんをよくご存知で同世代であった．娘さんが鹿児島大学に進学されたときも「娘が大原さんの後輩になる，鹿大はどう」と話をしてくれた．お会いするのは委員会や学会がほとんどだが，高桑さんとはいろいろつながりがあり，虫屋の世界は狭いのだけれども，何かそれ以上のものを感じていた．頼りになる相談相手であり，学会でお会いしたときもいろいろと意見を伺い安心をさせていただいた．あまりに急だった高桑さんとのお別れは，すぐには受け入れられないだろう．これから何か相談事ができたとき，高桑さんならどう考えるかを思いだし実感するのだと思う．ご冥福をお祈りする．

（北海道大学総合博物館）

高桑氏を偲んで

大林延夫

去る 9 月 29 日，横浜のベイシェラトンホテルで「高桑さんのお別れ会」があった．この日会場一杯にあふれた参会者の多さに，改めて氏の交友の広さと人望を知る事となった．だが僕と高桑さんとの個人的な交流はそれほど多くない．1 ～ 2 度は彼が我が家に来た事もあって，しかしその時の印象が深かったためか，子供たちは良く覚えていて「サンマのおじさんがテレビに出ていたよ」などと言っていたのを思い出す．

何時の事だったか，彼と「一度中国で虫を採ってみたいね？」等と言う話が出た．「中国は難しいけど，香港だって中国だから，きっと何か虫は採れるんじゃない？」「香港には虫屋の友人の鎌苅さんがいるから案内してくれるかも」「香港なら安いツアーがあるね」，とトントン拍子に話がまとまった．記憶は定かでないが「香港 5 日間 4 万円？」のツアーに二人で申し込んだ．今，昔の手帳を開いてみると，成田出発が 1986 年 6 月 4 日 17:45 で，帰りは 8 日香港 10：05 発となっているので実質 3 日間しかなかった．30 年前の事である．

当時商社員として香港に在住していた鎌苅哲二さんが迎えに来てくれたのだが，奥様が退屈しているから今夜は我が家で麻雀に付き合え，との事でそのままお宅に伺い，楽しく遊んでホテルに帰ったのは多分深夜だったのだろう，翌朝ツアーの添乗員にこっぴどく怒られた．彼にしてみれば乗客が初日から行方不明になってしまったのだから，泡を食ったに違いない．

ともあれ香港で採集なんて考えてもみなかった，と言う鎌苅さんの車で虫の採れそうな場所を探す．やがて九龍半島側の大帽山と言う所にポイントを定めて 3 人で採集開始．思ったより自然が残っていて，樹林の真ん中が幅広く防火帯として切り払われてはいたが結構楽しめた．カミキリでは *Embrikstrandia bimaculata* や *Acalolepta speciosa* 等の美麗種が記憶に残っている．山頂近くの笹原にでると，高桑氏が

写真1．1986年6月香港にて（左: 高桑氏，右: 鎌苅氏）．

写真2．2014年7月台湾にて（中央: 左高桑氏，右: 大林）．

マルバネクワガタ *Neolucanus championi* が飛翔しているのを見つけ，皆で走り回っていくつかネットインした．真っ昼間から笹の上をぶんぶん飛んでいるクワガタ虫なんて初めての経験である．

後日談だが，高桑氏の採集品を見た藤田宏氏が，小生の採集品も欲しい，と我が家まで取りに来て，しかしその帰りに酔っぱらって？電車の網棚に置き忘れたとか．結局鎌苅さんの標本が巻き上げられる事になったようだ．

閑話休題．高桑氏とは，その後「夢虫の会」の採集会で 2 ～ 3 度，2 年前に台湾で一度ご一緒した程度だが，昼間から缶ビールを片手になんとも楽しそうに虫採りをする姿はもう見られなくなってしまった．ご冥福を祈るばかりである．

（三浦市）

高桑さん，さようなら

久保田正秀

「まだ開いてないよね」

「まぁどこかありますよ，とりあえず出かけましょう」

お願いして委員になってもらった会議が早めに終わると，こんな感じで飲みに出かけるのが常だった．が，平成 28 年 3 月 4 日は少し様子が違っていた．

会議が終わって私の席を訪ねてくれたのまではいつも通りだったが，

「今日は・・・，ちょっと飲めないんだ」と言いつつ，手のひらでおなかのあたりを円を描くように擦っていた．

「そう，残念．じゃ 4 月になったらまた飲みましょう」と言ったものの心の片隅で『ひょっとしたら高桑さん，胃がんでも見つかったのかな？』との思いが頭をかすめた．これが直接お会いした最後になってしまったのだが．

その 1 ヶ月半前の 1 月 13 日，高桑さん，新里さんと 3 人で居酒屋のテーブルを囲んだ．前年 8 月，妻を脳幹出血であっという間に失った私をいたわり，「女房を亡くした男はがっくり来て後を追ったりするから，十分に気をつけるんだよ」と励ましてくれたのだが，まさかその高桑さんが 7 ヶ月後，同じ 8 月に死んでしまうなんて．

この時いつものばか話の中で，何気なく掴んだ高桑さんの腕が，やけに細く感じられてびっくりした．その記憶があったからこそ『胃がん？』という思いがかすめたのだが，まさかすい臓癌だったとは．

7 月 28 日，奄美大島に出張中であった私に勤務先から，しばらく連絡が付かなかった高桑さんがどうやら入院していたらしい，との連絡があった．早速高桑さんの携帯に電話すると「今，娘が鹿児島に帰るところだから，少ししたら電話する」とのこと．私は携帯を握りしめて電話を待った．なぜなら，高桑さんの声があまりに力なかったから．

10 分ほどで電話が来た．「実はすい臓癌で，これから様々な治療を試みる．自分がやらなければならない仕事はやるけど，他の人で済むことは他の人に頼んで欲しい．病気のことは藤田さんと丸山さんくらいにしか言ってないので，できる限り黙っていて欲しい」

あまりに思いがけない，重たい話に思わず私は，「高桑さんが元気になるんだったら奄美でコブヤハ

写真1．華飲み会裏方の打ち上げで．ネズミ男のまねをする高桑さん．2009年3月11日．

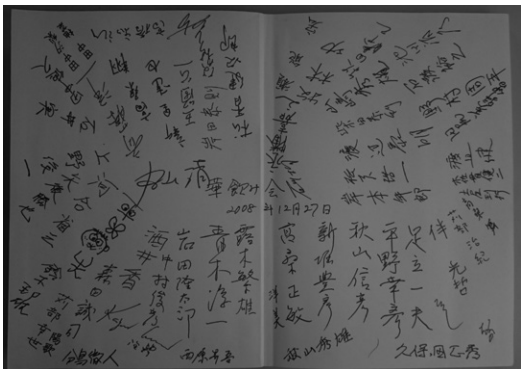

写真2．『高桑正敏の解体虫書』の見返しに華飲み会に参加した皆さんのサインをいただいた．ご本人はじめ奥様や舞さん，翔君の名前もある．2008年12月27日．